

(5枚プロット)

梅雨があけたら(第1稿)

作 山口 ひろたか

登場人物

松田広太(10)……小学校4年
" 芳郎(65)……広太の祖父
" 華(8)……小学校2年
野田武史(10)……小学校4年
広瀬洋一(10)……小学校4年・広太の親友
アツシ

P1～P6は生徒作品

P7～P8は塾長の批評

晴れの国・岡山の梅雨は短い。夏休みを間近に控えたクラスでは、休み半ばにある『地蔵祭』の話題で持ち切り。ハッピを着て小さな御輿を担ぐ地蔵祭は、地元の子供たちの大きな楽しみなのだ。そんな騒ぎから身を遠ざけるように松田広太（10）が机に突っ伏している。「広ちゃん、担がんの？」クラスの野田武史（10）が広太に声をかけるが無視。広太は馴れ馴れしい野田を疎ましく思っている。一ヶ月前、親の転勤で京都から岡山に引っ越してきた松田広太（10）はここに馴染めないでいた。

夏休みに入ったが、まだ雨がやまない。広太の家では、昼間共働きの両親に代わって祖母の芳郎（65）が、広太と妹の華の面倒を見ている。芳郎は、クーラーを効かせた部屋でパソコンやゲームに熱中する広太が心配でしようがない。そこへ華の友達がやってきて地蔵祭の御輿の練習をする。広太は、何の抵抗もなくここに馴染んだ華のことが許せない。

メールで京都の親友・広瀬洋一(10)に「家の中にお化けがいる」などと送ると、広瀬も同じようなメールを返してくる。広太は、広瀬が同じ思っていることが嬉しい。

相変わらず部屋にこもりっきりの広太。ある日コンビニに行くと、クラスの同級生と出くわす。その中には野田もいて「一緒に遊ぶ」と誘ってくるが、広太は無視する。返ってパソコンを見ると広瀬から「友達はできましたか？」のメールが届いている。広瀬に弱みを見せたくない広太は、「まあ、一応」などと、思わず嘘を返す。

毎日やって来る華の友達。地蔵祭の振り付けで家は騒がしい。毎日一人部屋で遊ぶ広太は、騒音よりも友達と仲良く遊ぶ華がうつつうしい。広太は、家に誰もいないときを見計らって、華のハッピーを捨ててしまう。

ハッピーがなくなっていることに気付いた加奈は大泣きするが、芳郎が「また作ってやるで」となぐさめる。バツの悪い広太はますます

す自分の世界に没頭していき、広瀬への嘘のメールも次第にエスカレートしていく。

そんなある日、広太の家に野田がやってくる。最初、居留守を使っていた広太だったが、芳郎が勝手に野田を部屋に入れる。仕方なく野田と遊ぶ広太だったが、最新のゲーム、パソコンを見たことがない野田はことあることに驚嘆し、広太を褒める。そんな野田に広太は少し得意げ。帰り際、野田が再び広太を地藏祭に誘うが、広太は何も答ええない。そんな広太を芳郎が黙って見ている。

度々、野田は広太の家に遊びにくるようになる。ある日、芳郎が広太と華を呼び手作りのハッピを渡す。それを見た野田は「広ちゃん、御輿やるんじゃない!」と広太の参加を喜ぶ。そんな野田に、広太は思わず「馴れ馴れしくするのはやめろ」と罵声を浴びせてしまう。それを見ていた芳郎は広太の頬を打つ。広太は思わず家を飛び出してしまふ。

京都の街中を広太が歩いている。あんな場

所は自分の住むところではない……一人で電車に乗って京都に帰ってきた広太は、昔、自分が住んでいたマンションを訪ねるが、すでに新しい家族が入っていた。しばらくシヨックを受けた様子の広太だったが、思い立ち広瀬へ電話をかける。

なじみのゲームセンターで合流した2人。広瀬は突然やってきた広太に驚いたが、仲間に連絡を回し、同級生を集めていた。久しぶりに仲間と盛り上がるが、そこには見慣れない顔一人が混じっている。「紹介するよ。アツシ」見慣れない顔は、広太が転校してすぐにやって来た同級生らしい。すでに仲間たちに溶け込んでいるアツシ。自分の入れ代わりでやってきたアツシが、チャホヤされるのが広太は悔しい。

広瀬の家で、広太は反発心からアツシのことを「生け好かない奴だ」と罵る。しかし広瀬は、アツシはこっちにきて馴染もうと頑張ったのだとかばう。親友の意外な言葉に戸惑

う広太。やがて広瀬の親から連絡を受けた芳郎がやってくる。帰り際、「今度はあっちの友達紹介しろよ」と広瀬に言われ、広太は泣きそうになる。

岡山への帰りの電車。怒られると思っていたはずの芳郎が何も言わない。黙っている広太に芳郎は黙ってハッピを渡す。「とりあえず地蔵祭でられい」優しく諭され、広太は堪らず芳郎の胸元で泣きじゃくる。

地蔵祭を一週間前にひかえ、小さな町は何処かここで祭の準備をしている。広太の家に野田がやってくる。「またゲームしてたん？」
「うるせえ」夜更かして眠気眼の広太を強引に連れ出そうとする野田に、芳郎がハッピを渡そうとする。しかし「野田に借りるからいい」広太は芳郎のハッピはいらないと駆け出していく。岡山の短い梅雨が終わり、蝉の声が聴こえる。芳郎は笑顔で広太の後ろ姿を見送った。(終わり)

梅雨あけ宣言 5枚プロット

(第1稿の批評)

いい話だが、まだ日記の段階。構成を組み換える必要がある。箱書を作って「出から核心をつく」ように、1枚目から読み手の気持ちをつかむにはどうすればいいかを考えてもらいたい。

作者の体験をもとにした作品とのこと。実は私も習作時代、似たようなものを書いた。稚拙なものだが130枚の映画シナリオ用に書いた生原稿を保存してあるので、読んで参考にもらおうと思う。

時代はまるでちがいで、太平洋戦争のころ、米軍による東京大空襲から逃れて、妹と二人で母の姉の家（広島）に預けられた「疎開」だった。多感な少年時代の追憶は、誰でも一度は書きたいものではなからうか。

ふり返ってみればニヤツとなってしまつような生活を、生真面目に懸命になって営んでいた純真なころの自分は、美しくほほえまし

く、物哀しさをともなつて胸の底に残っている
るので、ドラマの感動というものを身につけ
るために、ぜひ大事に仕上げてほしいと思つ。

P 2 広太の年齢は一度だけでいい。

かわりに華の年齢を。

祖母 祖父

P 3 返つて 帰つて

P 5 生け好かない いけ好かない。

いけは接頭語。